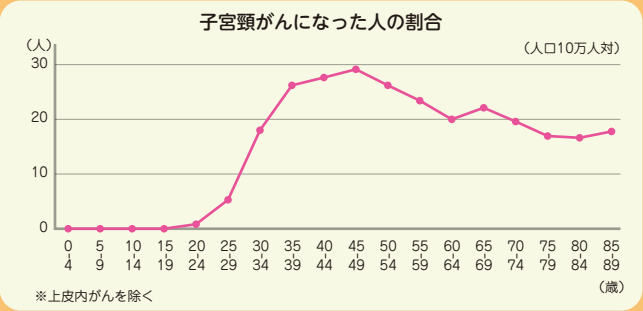
子宮頸がんは予防する方法があります。

これから大人になる女の子たちと保護者のみなさんに、知っておいてほしいことがあります。

30歳頃から子宮頸がんになる人は急増します。治療に伴って、将来の妊娠もあきらめなくてはいけないことがあります。

毎年、約10,000人の女性が新たに子宮頸がんを患い、残念ながら、約2,900人が命を落としています。特に20〜30代女性のがんの発症率では、子宮頸がん（上皮内がん含む）は第1位となっています。



出典：国立がん研究センター　がん情報サービス「がん統計」（全国がん登録）

子宮頸がんのほとんどはウィルス感染が原因です。そのため、ワクチンと定期的な検診で予防することができます。

子宮頸がん予防

HPVワクチン接種

子宮頸がんの原因となるヒトパピローマウイルス（HPV）の感染予防のために

子宮頸がん検診

定期的な検診により、がんになる前に発見することも

副反応についてはまず接種医療機関にご相談下さい。

北海道大学病院
HOKKAIDO UNIVERSITY HOSPITAL

厚生労働省　ヒトパピローマウイルス（HPV）感染症の予防接種に関する相談支援・医療体制強化のための地域ブロック拠点病院整備事業

厚生労働省サイト

子宮頸がんは ワクチンと定期的な検診で 予防しましょう

子宮頸がんとは?

子宮頸がんは子宮の入り口である子宮頸部と呼ばれる部分に発生するがんです。発がん性のあるヒトパピローマウィルス(HPV)が子宮頸部に持続的に感染することで、5〜10年かけてがんになります。HPVはありふれたウィルスで、多くの一般的な女性が一度は感染しますが、約90%は自然に排除されて治ります。HPVには200種類以上の型が発見されていますが、発がん性があるのはそのうちの一部です。子宮頸部は、婦人科の診察によって簡単に検査できる部分です。HPVが持続的に感染すると、細胞にも変化が現れるため、子宮頸がん検診によってがんになる前(前がん病変)から発見することができます。前がん病変であれば小さな治療で治すことができますが、一度がんになってしまうと、治療のために将来的な妊娠もあきらめなくてはいけないことがあります。

HPVワクチンとは?

HPVワクチンは、特に発がん性の強い16型と18型のHPVに対して感染予防効果を発揮します。ワクチンによっては他の型にも効果を発揮します。ただし、既に成立している感染を治すものではないため、適切な年齢で接種することが重要です。ワクチンと検診が普及した国々では、既に子宮頸がんが減少し、根絶されつつあります。HPVワクチンの効果は免疫反応を介して獲得されるので、接種した部位にかゆみや痛み等の症状がでますが、ほとんど場合は軽く、自然に治ります。世界中で使われているワクチンです。

HPVワクチンの接種について

定期接種

- **定期接種対象年齢　小学校6年生〜高校1年生相当の女子**
- **標準的な接種時期　中学1年生**

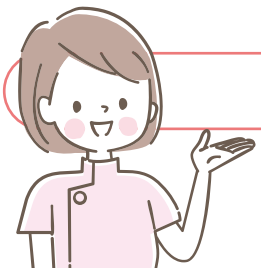
※HPVワクチンは6ヵ月間に3回接種が必要なため、3回とも公費助成を受けるには、高校1年生相当の年の9月までに1回目を接種する必要があります。

キャッチアップ接種(HPVワクチンの接種を逃した方のための接種)

- **接種の対象となる方　1997年度生まれ〜2005年度生まれ(誕生日が1997年4月2日〜2006年4月1日)の女性**
- **接種が受けられる時期　2022年4月〜2025年3月の3年間**

※詳しくは厚生労働省ホームページや市町村窓口でご確認下さい。

副反応が出てもしっかりサポートできる体制が整っています。まずは、接種医療機関にご相談下さい。
対象となる方は、**定期接種として公費助成が受けられます。**



子宮頸がん検診について

HPVワクチンは、すべての型のHPVに対して感染予防効果を発揮するわけではありません。
そのため、ワクチン接種と検診の両方を受けることが重要です。
20歳を過ぎたら、定期的に子宮頸がん検診を受けて下さい。

※ワクチン接種や子宮頸がん検診を希望される方は医師に相談し、説明をよくお聞きください。